# 家庭

美知代

妾は今岡本貴美子を訪ねやうとして居るのです。お貴美さんは妾の舊友で、此前女學校に居ました頃は、多い友達の中で一番親しく、級も同じなら歳もおつゝかつゝの、他所眼には眞實の姉妹とも見られた位、始終一所に居て離れたゝては御座いませんでしたが、左樣です、最早彼是十年にも成りませうか、お貴美さんが思ひ掛けず中途で學校を退いて、田舍へお嫁きになつて以來、妾は更に大學部に進んで、其後教育事業に携はつたので、懷しい、逢い度いと思はぬてはありませんでしたが、勤のある身の、兎角は思ふやうにもならなかつたので。

あゝお貴美さんは妾が懷しむやうに、妾を待つてゝ被下るてせうか、妾共は此夏を共に送るとゝ成つて居るのです、それにしても十年と云へば一昔、其永い間には甚麽にかお互變りもしたで御座いませう。

今しも汽車は某驛に着きました、戸を開けて車を下りますと、

『宮川さん、お常さん！』

頻りに妾の名前を呼びながら、よく肥つて如何にも福々しい丸髷の奥樣が駈けて來る、妾は傍に寄つて驚ろきました。

『さぞまあ貴女お疲れなさいましてせう、甚麽にお待ち申しましたか』

『アラお貴美さん！妾お見それ申してよ、だつて貴女、餘り肥つてらつしやるんですもの、それに……』

『オホ、、所帶やせでもしてると思召たのでせう、違いますわ、幾ら家庭に入つたからつて、貴女の思つてらつしやるやうじや御座いません、本當に呑氣で、年中笑つて計り、それを仕事にしてますの』

思ふ事も無げに笑つておもざしの、さても變れば變るもの哉は燃えて、流石懷しの友情に滿されては居るものゝ、嘻しいにつけ、悲しいにつけ、事々に輝いて、こゝろのさまを口程に語りもした、其秀れた表情は最早見るとも出來ません

『千枝ちやん、俊ちやん、さあ此處へ來て御挨拶するんですよ。——お手紙を頂きましてからと云ふもの、毎日、東京の伯母さんは何時被入るんだつて、もう〳〵甚麽に八釜しかつたてせう』

そつと傍に來て、恥かしいやうな、懷しいやうな樣子にお辭儀をした二人、姉は八つばかりの愛くるしい丸顔で、お納戸地矢飛白の絹上布に、薄い淡紅色紋ちりのしごきを結び下げ、弟は流行の半穿の洋服に、緣の反つた麥藁帽を横に冠つて、これも可愛い五歳くらゐ。

『まあお可愛い！』

輕う肩を叩いて頭を撫でると、可愛い鹿の樣な眼をあげて姉は物珍しさうに表の袴姿に見入るので。

『皆な貴女のねえ』

と小聲に、今更らしく尋いても見るのでした。

『オホ、、何でせうねお常さんは、まあ貴方よろく御存じの





くせに、無論妾のですと』

『本當にねオホ、、だつて餘り大きくて被居るんだもの、まだお下がおありてせう』

『え、今一人家にねんねしてますの、お常さん、妾最早三人兒持に成つちまいましたわ。學校時代はつい昨日のやうに思ふのですけども……』

淋しく笑つて、勝ほこつた態度に、嬉れしさはあり〳〵見えるのでしたが、妾はけつく氣の毒なやうな、而して此片田舍に一生を埋れて、小供の世話から何から、つまらないとに齷齪する友を、輕侮むやうな氣にも成りますので。

やがて手荷物を受取つて、出迎への下男に持せ、用意してあつた人力車に妾共は一人づゝ小供を抱いて、某村の岡本家へと向ひましたが下男のさきぶれて御座いませう『お歸んなさいまし』を口々に、召使共の立つたのは白壁の大手を廣う廻らした大きな邸宅、玄關に立つて莞爾迎へたのは主人ですが重りとしてやさしらしい、京都同志社の卒業生。一應の挨拶が濟むと、まづ息つぎの砂糖水、氷のやうな涓水につかれを忘れて、待ち不呂にと沸された湯を浴び、それから妾の部屋だと導かれたのは離れの八疊、何氣無く椽側に出て見ると、獨身者の妾に見せつけてもするかのやう、打水涼しう、秋海堂の花壇にみどり兒を抱いて立つたのはお貴美さん、二人の小供は父と共に、泉水の金魚にふを投げて餘念なく遊ぶのでした。

平常から家庭と云ふものに、さまでの敬意を拂はぬ妾ではありますが、何うしたものか此時計りは云ひ知らぬ煩悶に、今の我身をさも俯甲斐ないものゝやうに、涙さへとめ途も無く溢れるのです。

あゝ家庭！

妾は今迄に度々結婚をすゝめられ、家庭に入れと迫られもしましたけれど、いつも獨身主義を主張して、年老つた兩親の心配を他所に、二十八と云ふ今日迄寂しい老嬢で通しました、いつぞや同窓會の時、我々教員連中計り五六人殘りまして、ミス、ミセス論をもち出して大に議論したとが御座いましたが、一體教育事業は献身的のものであるから、複雜な家庭に入つて、良人やら小供やら煩はしさに如何して事業の上に全力を注ぐことが出來やう、何うしても獨身でなければいけないとは妾の説、するとそれに反對したのが小見山と云つて四十近い老嬢、一口に献身と云つた處で、感情の美しい處が解らないで、本當の献身が出來るか何うか、頗る怪しいものだと云ふのです、妾は口惜しくて〳〵、

『それじや貴女は此宮川の献身も信用出來ないと仰有るのですか』となぢりました。

『ホ、、決して』と小見山は眞面目に云つて

『けども宮川さん、貴女些少し寂しくお感じなさらない？』

『寂しくつて如何？』

『アレまあ、左樣尋かれると一寸御返事に困りますけども、つまり斯う何だか頼りないやうな、心細いやうな氣持は致しませんですか』

『……』

妾は考へない譯には參りませんでした、けれどもわざと氣

もないさまに、

『が併し何も寂しい譯が御座いませんわ、だつても妾には良人もなければ小供もない、けれどそれに代るだけの事業もあれば樂しみもある、決して誇るのじや御座いませんが、敎へ兒の中から隨分立派な淑女をも出しました、これだけ澤山な敎へ兒を持つて何を淋しく感じませう?!』

『矢張お若い故ですよ、今に御覽なさい屹度後悔なさいますから』と小見山は双頰に笑を含み乍ら、何となく落付かぬ調子でした。

『そんなら早く夫人(ミセス)に成ると好いわ、小見山さん何故御結婚なさらない?』誰かゞ横槍を入れますと、

『つまり仕方がないから、……妾のやうなものを誰が貰つて呉れませう』とばかり、後は一同大笑に終るのでしたが……

つまらない、つまらない、妾は何時迄お孃樣方の保姆をつとめやうとするのでせう、斯う思ふと、無暗と物悲しく成つて胸も破れるやう。

あゝ何故此樣な變な氣持に成つたでせうか、友の家庭の睦しさ、それが動機と成つて妾の主義はゆるぎ初めたので御座います、結婚するなら今、妾は最早已に老孃と呼ばれた身です、三十を越して後嘆いたとて追付ぬ、ふた心とそしらばそしれ、變手古な献身よりも、譯の解つた夫人(ミセス)の同情が幾ら生徒を益するか、妾は理想の良人を撰んで、理想の家庭を造りせう。

（完）





101